言語研究（*Gengo Kenkyu*）**154**: 153–175（2018）　doi: 10.11435/gengo.154.0_153

日英語母語話者における事態の描き方の型の違いと事態の捉え方の型の違い

伊　藤　　創

関西国際大学

【要旨】一方から他方へ働きかけがなされる事態を描写する際，英語母語話者は働きかけ手（agent）を主語に立てる傾向が日本語母語話者のそれより強い。本研究では，この描き方の型の違いが両者の事態の捉え方の型の違いに根ざしているのかどうかを検証するため，働きかけに関わる事態について，その「次」に起こった事態を想像してもらい，いずれの参与者を主語として描くかを比較した。次の事態を描く際には，当該の事態でより焦点をあてて捉えている参与者について描くのが自然と考えられるからである。結果は，ほぼ全ての画像で英語母語話者のほうが日本語母語話者より agent を主語に立てる割合が高かった。このことから，1）日英語母語話者の事態の描き方の型の違いは，両者の事態の捉え方の型の違いに根ざしており，2）その違いは，英語母語話者は行為連鎖／力動関係において力の源である参与者に，日本語母語話者は共感度の高い参与者により際立ちを感じやすいという違いであることが強く示唆される*。

キーワード：事態把握，事態描写，際立ち，焦点

1. はじめに

各言語には，事態の描き方に関して好まれる「型」があることは古くから指摘されている。この事態の描き方の「型」とは，同じ事態を描く際に，どのような視点からその事態を捉え，その中のどの情報をより詳しく描くか，あるいは同じ情報を言語のどの要素で描くか，といった「傾向」のことであり，それらが言語によって大きく異なるのである（外山 1973，国広 1974，池上 1981，Hinds・西光 1986，Talmy 2000，森田 2002，金谷 2004 など多数）[1]。

* 本稿は，日本言語学会（第 153 回大会）における口頭発表の内容を，発表時に頂いた助言をもとに調査方法を改善し，また被験者の数を増やした上で，大幅に改訂したものである。ご助言を頂いた参加者の方々に深く感謝申し上げる。また本稿執筆にあたっては，本誌『言語研究』の 2 名の査読者から大変貴重なご指摘，ご意見を頂いた。ここで改めて御礼申し上げたい。本研究は日本学術振興会科研費 17K04853 の助成を受けている。

[1] 名詞句における定・不定や可算・不可算の区別，文法的性の区別，あるいは叙述の法に関して反実仮想か単なる条件かといった，ある言語においては表示義務のある意味的区別が，別の言語においては表示の義務はないといった違いも言語間における事態の描き方の違いとして捉えられる。しかし，本稿では特に，ある事態を描く際に A と B という二つ（あるいはそれ以上）の描き方が可能である場合に，当該の言語において特に A の描き方に偏る，という描き方の「傾向」を事態の描き方の「型」として扱う。

伊藤・王（2016）も，日英語母語話者[2]を対象にこうした事態の描き方の「型」に関する調査を行い，特に事態のどの参与者に焦点をあてて描くかについて，その傾向が両言語母語話者の間で大きく異なることを明らかにしている。同調査では，以下の図 1 のような行為や力の働きかけ手（以降「agent」[3]）にあたる参与者（図 1 では〈鮫〉）とその働きかけの受け手（以降「patient」）にあたる参与者（図 1 では〈人〉）が描かれた画像 27 枚について，日本語母語話者（62 名）と英語母語話者（54 名）にその内容を自由に描写させ，どちらの参与者に焦点をあてた描写を行うかを比較している。

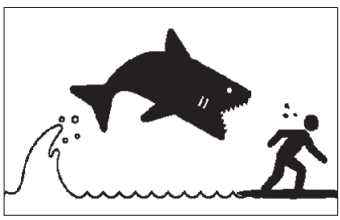

図 1

焦点があてられている参与者の同定については，伊藤・王（2016）では主語として描かれていることをその基準としているが，これは主語として描かれる参与者は事態の中で最も認知的な際立ちが高い参与者であるという，Langacker（1990）以降，特に認知言語学の領域を中心に広く支持されている分析に基づいたものである（尾谷 2001，谷口 2005，森山 2005，小野寺 2008 なども参照）[4]。以下に図 1 に対する日本語母語話者と英語母語話者による描写の例を示す。

（1）　a.　サメが人間を食べようとしています。
　　b.　A shark jumps from the water to attack a drunken man on the shore.
（伊藤・王 2016: 31，下線筆者）

（2）　a.　男の人がサメに食われそうになっている。
　　b.　The surfer tries to flee as fast as he can.　（伊藤・王 2016: 31，下線筆者）

（1）は agent である〈鮫〉に焦点をあてた描写であり，（2）は patient である〈人〉

[2] 伊藤・王（2016）では，日英語母語話者に加えて，中国語母語話者についても描写の傾向の違いを分析しているが，本稿ではこれらの三言語の中で特に対照的な違いを見せる日英語母語話者について調査・考察を行うため，中国語母語話者の描写についての分析の紹介は割愛する。

[3] 本稿では「agent」を，一方から他方への何らかの働きかけがなされる事態における動作や力の〈働きかけ手〉という意味でのみ用いる。（2b）の「The surfer」は，逃げるという動作を行なっている主体という意味で「agent」ということもできるが，本稿では，そのような意味では「agent」を用いない。

[4] Tomlin（1995, 1997）では，発話者は視覚的な焦点が事態の中の一つの参与者に向くように仕向けられた状態においては，当該事態をその参与者を主語として描くことが確かめられている。

に焦点をあてた描写である[5]。この二つのタイプの描写の割合を日英語母語話者で比較すると，英語母語話者の描写のうち，87.8% が〈鮫〉を主語として立てたのに対し，日本語母語話者の描写は，62.5% が〈人〉を主語に立てて描いており，両者の間には統計的にも有意な傾向差が見出されている[6]。

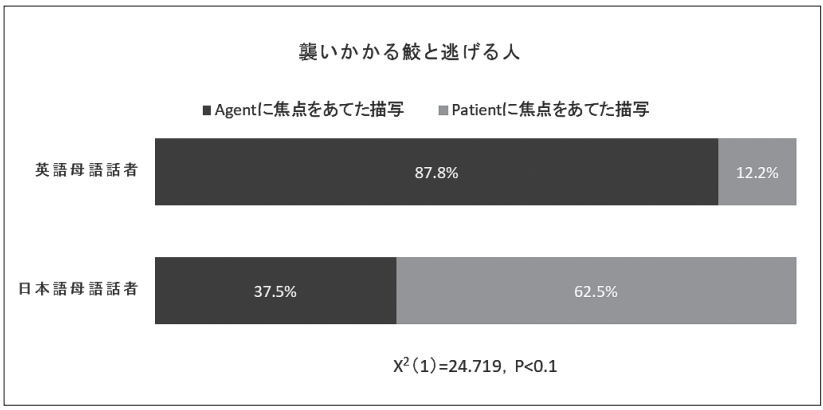

図 2

英語母語話者は agent に，日本語母語話者は patient に焦点をあてて事態を描くという傾向は，伊藤・王（2016）の調査で使用された多くの画像で同様に見られた。以下にそれらの典型的な例について画像と描写文の例を示す。

図 3

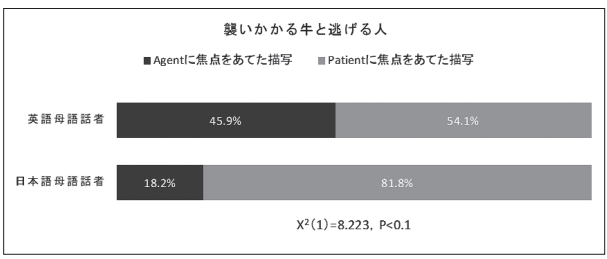

図 4

[5] 伊藤・王（2016）では，(2）のように patient を主語に立てている描写について，(2a）のように受動態を用いて主語に立てられた参与者が patient であることを明示している描写と，(2b）のように patient としては描いていない描写を区別しているが，本研究ではこの区別については考察の対象とせず，agent, patient のいずれに焦点をあてているかのみに着目する。また伊藤・王（2016）による両者を区別した状態での有意差検定の値についても，本稿では agent を主語とするもの，patient を主語とするものの二つの区別のみで再度検定を行った値を記している。

[6] 伊藤・王（2016）における母語話者による描写の割合の違いについての有意差検定（カイ二乗検定）の値については，日中英語の三言語の母語話者を対象とした値であるため，本稿では日英語の二言語の母語話者による描写の割合について再度検定を行った値を記している。

【agent に焦点】

（3）　a.　牛が人を追い回している。

　　b.　A bull is chasing a man.　（伊藤・王 2016: 32，下線筆者）

【patient に焦点】

（4）　a.　男の人が闘牛から逃げています。

　　b.　A man is being chased by a bull.　（伊藤・王 2016: 32，下線筆者）

図 5

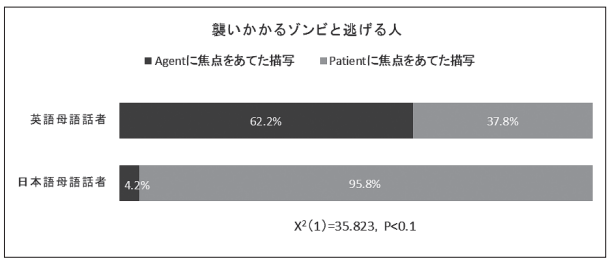

図 6

【agent に焦点】

（5）　a.　ゾンビが襲ってきた[7]。

　　b.　Zombies are chasing a man.　（伊藤・王 2016: 33，下線筆者）

【patient に焦点】

（6）　a.　男性が，襲い来るゾンビから逃げています。

　　b.　A man is being chased by zombies.　（伊藤・王 2016: 33，下線筆者[8]）

図 7

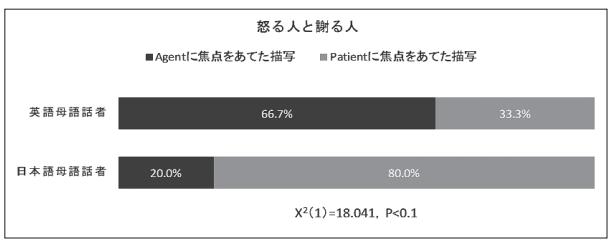

図 8

[7]「～てきた」という表現から，追われている側の人間に焦点が当たっているという見方もあろうが，伊藤・王（2016）ではすべて主語の位置にくるという統語的な特徴のみを基準に分類を行なっており，後述する本研究における「次」の事態の描写についても，この基準に従って描写を分類した。

[8] 図 5 についての描写文（5b）（6b）について，伊藤・王（2016）では異なる画像に対する描写文が記載されてしまっているため，ここでは本来記載されるべきであった文例を記載する。

【agent に焦点】

(7)　a.　社長が部下を叱っています。

　　b.　A boss is yelling at his worker.　（伊藤・王 2016: 35，下線筆者）

【patient に焦点】

(8)　a.　偉そうな上司に部下が謝っています。

　　b.　An employee is giving an excuse to boss.　（伊藤・王 2016: 35，下線筆者）

図 9

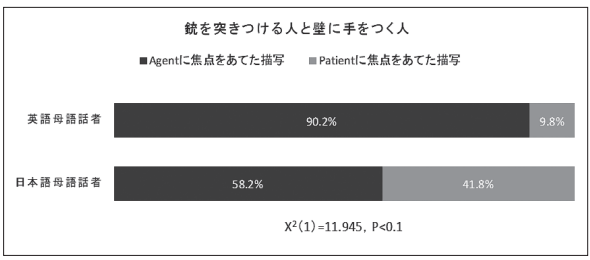

図 10

【agent に焦点】

(9)　a.　警察官が容疑者に銃を向けています。

　　b.　A fat policeman is holding someone at gunpoint.

（伊藤・王 2016: 36，下線筆者）

【patient に焦点】

(10)　a.　犯人が警官にとりおさえられました。

　　b.　Purported criminal is being arrested.　（伊藤・王 2016: 36，下線筆者）

図 1，図 3 では，〈鮫〉や〈牛〉といった〈人以外〉の参与者から〈人〉に対して働きかけがなされている。図 5 では〈ゾンビ〉という〈人〉とも〈人以外〉とも捉えられる参与者から〈人〉への働きかけ，図 7，図 9 では〈人〉から〈人〉へと働きかけがなされている。これらのいずれにおいても，agent を主語にした描写，patient を主語にした描写の両方が見られるが，日英語母語話者の描写を比較した場合，英語母語話者には前者のタイプの描写が，日本語母語話者には後者のタイプの描写が相対的に多く見られるのである。

2. 主語を選択する原理

本研究では，日英語母語話者に見られる上記のような描写の傾向，すなわち「描き方」の型の違いが，「言語」のレベルにのみ見られる違いなのか，それとも両言語母語話者の「認識」のレベルにおいても見られる「捉え方」の型の違いなのかを検証する。検証に先立って，まず事態に複数の参与者が関わる場合に，そのいずれ

が主語として選択されるかについてどのような要因が関わっているかを考えたい。

先述のように，伊藤・王（2016）の調査では，主語として描かれる参与者を事態の中で最も認知的な際立ちが高く捉えられているものとして，日英語母語話者の描写の型を分析している。参与者の際立ちの高さを決定する要因は様々であるが，特に伊藤・王（2016）の調査で提示されたような，一方の参与者からもう一方の参与者へ何らかの働きかけがなされる事態においては，まずは「行為連鎖関係（action chain）」（Langacker 1991），「力動関係（force dynamics）」（Talmy 2000）という働きかけの方向性や伝達の順序に関わる要因があげられるだろう。

この観点から見た場合，agent にあたる参与者は行為連鎖の最も先頭に位置するものであり，「力の源（energy source）」として最も際立ちが高く捉えられ，したがって「主語」として描かれることになる（對馬 2011:47）。一方，patient にあたる参与者は「働きかけのたまり場（energy sink）」として，agent にくらべれば際立ちが低く，二番目に際立つために「目的語」として描かれることになる（同 2011: 47）。下記の例などはその典型的なものであろう。

（3）　a.　牛が人を追い回している。
　　b.　A bull is chasing a man.　（再掲）

しかしながら，行為連鎖／力動関係においては際立ちの低い patient にあたる参与者のほうが，主語として描かれる場合もある。

（4）　a.　男の人が闘牛から逃げています。
　　b.　A man is being chased by a bull.　（再掲）

（4）は（3）と同様，〈牛〉が〈人〉を追いかけている図 3 に対する描写であるが，〈追いかける〉という働きかけの patient にあたる「男の人」「a man」が主語として描かれている。こうした例は，〈追う側〉と〈追われる側〉という行為連鎖／力動関係という観点からは「闘牛」や「a bull」よりも際立ちが低いと考えられる「男の人」「a man」が，「共感度（empathy）」（久野 1978）というまた別の観点において，より高い際立ちを得ていると説明できる。

「共感度」とは，「文中の名詞句の指示対象に対する話し手の自己同一視化（久野 1978: 134）」の度合いとされ，例えば，一人称の名詞句の指示対象（話し手）に対する共感度は，二人称，三人称の名詞句のそれより高くなる。また，有情物と無情物を比較した場合は，animacy hierarchy（Silverstein 1976）においてより上位に位置する有情物に対する共感度がより高くなる。さらに，同じ有情物でも，〈人〉と〈（人でない）動物〉を比べた場合には，humanness hierarchy（Kuno and Kaburaki 1977）においてより上位に位置する〈人〉に対する共感度のほうが高くなる。参与者に対する共感度が高ければ高いほど，その参与者の際立ちは高くなり，主語として描かれやすくなる。（4）の例は，まさにこの共感度の高さによって「男の人」「a man」の際立ちが高まっている例だと考えることができる。

agent であることだけでは主語として描かれる十分条件にならないだけでなく，agent という観点のみに基づいて主語を選択した場合には，文そのものが不自然になってしまうこともある。下記の例では,「津波」「大波」は agent,「三陸地方」「私」は patient とみなせるが，（11b）は不自然である。

（11）　a.　津波が三陸地方を襲った。
　　b.　?大波は私をさらった。　（角田 1991:51，下線筆者）

力動関係においては〈力の源〉であり，より際立ちの高い「大波」も，共感度という点で大きく上回る「私」を，いわばさしおいて主語の位置を占めることはできないのである。

下記のような例は,「共感度」という観点からはどのように説明できるだろうか。

（8）　a.　偉そうな上司に部下が謝っています。
　　b.　An employee is giving an excuse to boss.　（再掲 下線筆者）
（10）　a.　犯人が警官にとりおさえられました。
　　b.　Purported criminal is being arrested.　（再掲 下線筆者）

（8）（10）の各文は, 参与者のいずれもが〈人〉である事態を描写したものであるが,〈叱る〉,〈取りおさえる〉といった働きかけの patient が主語として描かれている。事態の参与者がいずれも〈人〉であり，共感度が同じであるとするならば，行為連鎖／力動関係において際立ちが高い agent が主語の位置を占めるのが自然なように思われる。しかし（8）では,〈叱る〉という力動関係ではなく〈謝る〉という力動関係で捉えられることによって，また（10）では受け身で描かれることによって,〈叱られる側〉〈逮捕される側〉が主語の位置を占めている。

こうした例については,「共感度」が, 人称あるいは〈+animate〉〈+human〉といった指示対象の客観的な物理的属性のみによって決定されるものではなく，話者の感じる〈善良な人に思える〉,〈可哀想で同情すべき存在である〉といった主観的な捉え方によっても決定されるものであると考えなければ説明できない。伊藤（2016）が指摘するように，同じ〈人〉であっても,〈怖そうな人〉〈犯罪者〉より〈優しそうな人〉〈被害者〉の方がより〈近い〉と感じられる（すなわち共感度が高くなる）し（伊藤 2016:20），また（10）のように,〈警官〉のほうが善なる存在であっても，それが悪徳警官のように感じられる場合は，犯人のほうに同情し，そちらへの共感度が高くなる可能性があるのである。（8）（10）において主語として描かれている参与者は，こうした話者の主観的な捉え方が加えられることによって共感度が高まり，その結果認知的な際立ちが増しているものと考えられる。この点に鑑みて，本稿では「共感度」をこのような主観的な捉え方も含めた尺度として扱うことにする。

ここまでの議論を踏まえ, 上記の図 1, 図 3, 図 5, 図 7, 図 9 などの事態について, 1）日英語両母語話者に，agent を主語に立てた描写と patient を主語に立てた描写のいずれもが見られる一方で，2）英語母語話者は日本語母語話者に比べて，agent を主

語に立てる傾向が強いというように事態の描き方の型に違いが見られる，ということについて考えてみたい。

1）の一つの言語話者内に両方の描写が見られるという事実は，日英語母語話者のいずれにおいても，行為連鎖／力動関係のほうが共感度よりも参与者の際立ちの順位を決める際の重要な要因になる場合もあれば，その逆の場合もありうるということである。しかし，そこに 2）の事実を合わせると，（相対的な傾向差ではあるが）日英語母語話者の間で事態の捉え方の型に違いがある，すなわち，英語母語話者にとっては，共感度よりも行為連鎖／力動関係のほうが参与者に際立ちを感じるより重要な要因として機能する傾向があるのに対し，日本語母語話者にとっては，逆に共感度がより重要な要因となる傾向があるということが予想される。

3. 日英語母語話者における事態の「捉え方」の型の違いの検証

3.1. 調査の主眼

上述のような，行為や力の働きかけに関わる事態についての日英語母語話者の「描き方」の型の違い，およびそこから推測される両言語母語話者のそれらの事態の「捉え方」の型の違いは，あくまで言語レベルにおける現象の観察から導かれたものである。そこで，本研究では，本当に前者の違いが後者の違いに根ざしたものなのかどうかについて検証を行う。

事態の「描き方」と「捉え方」のレベルの違いと両者の関連性については，これまでも，言語によって話者の思考が規定される（したがって異なる言語を話す話者の間では事態の認識のあり方が異なる）という「言語相対論」，いわゆる「サピア・ウォーフの仮説」の検証という形で多くの研究者が論じてきた（本研究では〈言語による思考の規定〉という側面については扱わないが，同仮説の理論的帰結である〈言語が異なればその話者の認識も異なる〉という仮定を検証する点については軌を一にする）。しかし，これまでの言語相対論に関わる議論は，ある意味的区別を言語表現として義務的に（あるいは他の言語と比較してより詳細に）表示する言語の母語話者とそうでない言語の母語話者を比較し，前者のほうが後者よりも認識のレベルにおいてもその区別に敏感であるかどうか（あるいは，その区別が言語的区別に影響されているかどうか）を検証するものがほとんどであった[9]。すなわち，伊

[9] 例えば，最も古くからなされているのは，色彩語彙をより多く持つ（あるいは，特定の色彩スペクトルを識別する語彙を持つ）言語の母語話者とそうでない言語の母語話者の比較（Berlin and Kay 1969，Kay and Kempton 1984，Winawer 他 2007）や，特定の法（mode）を持つ言語話者とそうでない言語話者の間の比較（Bloom 1981，Au 1983 など）などがあげられる。こうした検証は，空間および時間（Levinson 1997，Boloditsky 2001，Boroditsky and Gaby 2010 など），加算・不加算，あるいは文法的性といったモノのカテゴリー化（Lucy 1992，Boroditsky 他 2003，Imai and Saalbach 2010，Papafragou 他 2008 など）など様々な領域に範囲を拡大するとともに，eye tracking system や fMRI など様々な機器の活用により，文化的な差異をできるだけ排除して，純粋に言語構造の違いによる認識の違いを見出そうとするなど，検証方法の洗練もなされている。しかし，ある意味的区別を持つ言語話者とそうでない言語の話者を比較するという方法論は基本的に変わらぬままである。

藤・王（2016）の調査で明らかにされたような，ある言語では特定の描き方が好まれる（偏重される）という，事態の描き方の「型」の違いは議論の対象とされてこなかったのである。そこで本研究では，こうした描き方の「型」の違いが，その言語話者の認識レベルにおける事態の捉え方の「型」の違いに根ざしているかどうかを，伊藤・王（2016）に追加調査を行うことによって検証する。

3.2. 調査の手続き

調査は，英語母語話者 49 名，日本語母語話者 51 名を対象に，上記の伊藤・王（2016）の調査で用いられた画像のうち 15 枚を用いて行った[10]。被験者には，それらの画像に描かれている事態の「次」に何が起こったかを想像し，それぞれの母語でその事態を描いてもらった。示された事態の次の事態を想像して描く際には，その事態の参与者の中で最も焦点をあてて捉えているものについての描写になることが予想されるからである。すなわち，次の事態の描写において主語として描かれる参与者から，その事態の中で最も焦点をあてて捉えられている参与者を明らかにすることができると考えられるのである。

例えば，図 1 の事態を，英語母語話者が agent である〈鮫〉に焦点をあてて捉える傾向があるならば，その次の事態を想像する際にも，〈鮫〉に焦点をあてた（12）のような描写が日本語母語話者よりも多くなることが予想され，また，日本語母語話者が patient である〈人〉に焦点をあてて捉える傾向があるならば，（13）のような描写が英語母語話者よりも多くなることが予想される（（12），（13）を含め，以下に示す例文は実際の調査において得られた描写である。（13b）のように主語が省略されている場合もある）。

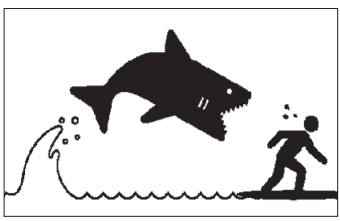

図 1（再掲）

[10] 伊藤・王（2016）の調査では 27 枚の画像が用いられているが，これらの全ての画像について描写を行うのは被験者の負担になることが予想されたことから，約半数の 15 枚に絞って調査を行なった。特に，描かれている事態がどのようなものか分かりにくいと思われるもの（例：蹴りを放っていることを描いた画像が踊っているようにも見えるなど），あるいは agent，patient の一方が大きく描かれているために際立ちが高くなっている可能性があるものなどを中心に省いた。また 15 枚には，ダミーとして参与者が一つしか描かれていないものが 2 枚含まれている。

【agent に焦点】

（12）　a.　The flying shark knocks the man off the surfboard.

　　b.　The shark bites the man's leg and throws him into the ocean.

【patient に焦点】

（13）　a.　逃げ切れなかった男性は，サメに食べられました。

　　b.　ギリギリでサメから逃げることが出来た。

調査は，15 枚の画像をランダムに被験者に提示し，次に起こる事態を想像して，その内容を描写した文をキーボードで入力してもらうという形で行なった。agent と patient の位置が左右に偏らないように，下記のように左右に反転された画像のどちらかを，やはりランダムに提示した（本稿では，以下の図 11 以外全て agent が左にある図に統一して示す）。

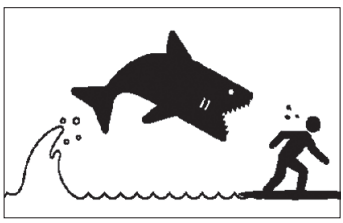

図 1（再掲）

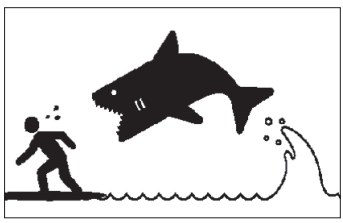

図 11

被験者の日本語母語話者は，日本の大学生 35 名，社会人 16 名の合計 51 名，英語母語話者は，アメリカ人 27 人，イギリス人 11 人，ニュージーランド 2 人，オーストラリア人 1 名，国籍記入なし 8 名（ただしアメリカまたはイギリスのいずれか）の計 49 名であり，いずれも大学生である [11]。異なる国籍の英語母語話者を被験者としたのは，できるだけ文化的な影響を排除し，英語という言語の母語話者の捉え方の型をみるためである。

調査で得られた描写文は，上記の（12）（13）のように画像に描かれている agent にあたる参与者と patient にあたる参与者のいずれを主語に立てて描いているかを基準に分類を行った。下記の（14）のように，主節と従属節の主語が異なっている場合は，主節の主語を基準に判断した。例えば，（14a）は agent である「the shark」に焦点をあてた描写，（14b）は patient である「男性」に焦点をあてた描写として分類した。（15）のように重文で agent と patient の両方が主語として立てら

[11] 英語母語話者については，イギリス，アメリカに在住の調査協力者にデータの収集を依頼したが，調査項目である国籍の記入がないものもあった。調査においては，バイリンガルは二言語併用により本調査結果に影響を与える可能性があるため，そのような英語母語話者は対象にしないことを伝えてデータの収集を依頼している。したがって国籍未記入の被験者もバイリンガルではないアメリカ人，イギリス人のいずれかである。

れている場合は，いずれに焦点をあてているか判断しかねるため，分析対象に含めなかった。（16）のように，agent，patient のいずれでもないものが主語として立てられている場合も，agent，patient のいずれにも焦点があたっていないと考え，分析対象から省いた。先の（13b）のように主語が省略されている場合は，適宜補って判断した。

【主節と従属節で主語が異なる例】

（14）　a.　The shark will bite the man［who is trying to run away］.

　　b.　男性が助けを呼び［陸に揚がった］サメを滅多打ちにします。

【いずれに焦点をあてているか判断しかねる例】

（15）　a.　男性は逃げ切り，サメは海にかえりました。

　　b.　The shark will fall back into the ocean and the man will run to safety.

【いずれにも焦点があたっていないと考えられる例】

（16）　a.　サメが人間を飲み込もうとした瞬間，サメよりも大きなシャチが現れ，サメを食べた。

　　b.　このあとこの海が使用禁止になった。

3.3. 調査の結果

調査の結果，全体的な傾向として，両言語の母語話者とも，画像に描かれている事態を描く場合に比べ，描かれた事態の次の事態を想像して描く場合には，patient を主語に立てる傾向が強く見られた。これは，ダミーを除く全ての画像が，一方の参与者からもう一方の参与者への働きかけが描かれている事態であることを考えると自然なことであると思われる。当該の働きかけの結果，何らかの影響を被るのは，まず patient の側だからである。例えば，殴った側の参与者と殴られた側の参与者がいる場合，前者の行為があって，その行為が後者に伝達される。この行為連鎖の流れを考えるならば，次の事態を描く際には後者の殴られた側がどうなったか（e.g.〈倒れる〉〈血を流す〉など）を描くのが認識の流れとしては自然であると思われる。

図 1 の画像について画像に描かれた事態を描写した場合と，描かれた事態の次の事態を描写した場合を比べると，前者では英語母語話者の 87.8% が agent である〈鮫〉を主語に立てたのに対し，後者ではその割合が 36.6% に減少している。日本語母語話者の描写も同様に，37.5% から 23.9% へと割合が減少している。

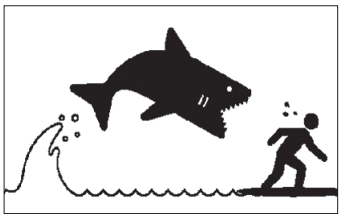

図 1（再掲）

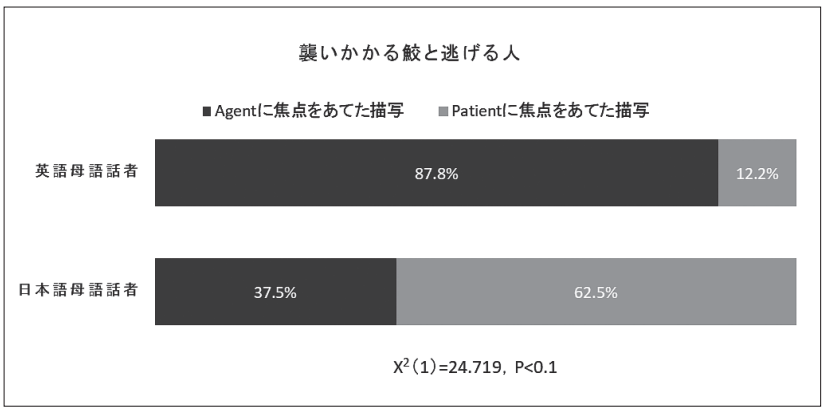

図 2（再掲）

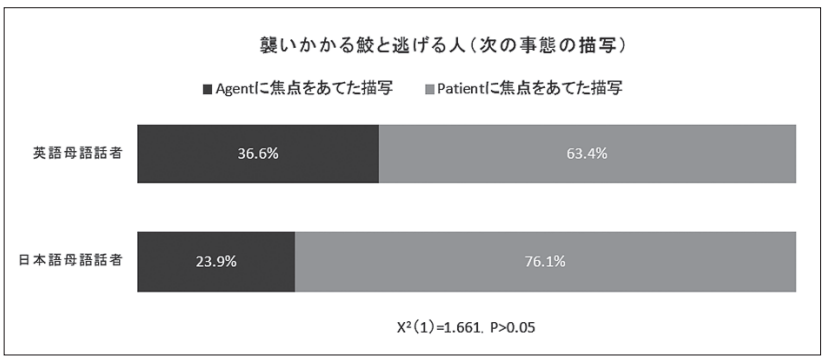

図 12

しかし，非常に興味深いことに，このような傾向が認められても，やはり英語母語話者が agent を主語に立てる割合は日本語母語話者よりも高く，15 枚の画像のうち 11 枚について agent が主語に立てられていた（15 枚のうち，2 枚はダミーとして参与者が一つしか描かれていない画像であるため，実質的には 13 枚のうち 11 枚にその傾向が認められたことになる）。

以下に，画像とともに日英語母語話者による「次」の事態の描写の例を示す。例

文は，agent に焦点をあてた描写と patient に焦点をあてた描写のそれぞれを 2 文ずつ示す。また，グラフでは日英語母語話者におけるそれぞれの描写の割合を示してある。

次に示す 6 枚の画像は，日英語母語話者の「次」の事態の描写のあり方が統計的にも有意に異なるものである。

図 9（再掲）

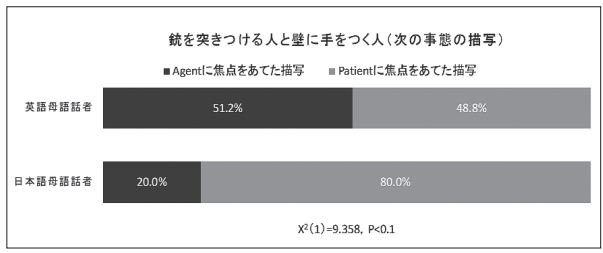

図 13

【agent に焦点】

(17)　a.　The policeman shoots the man in the head.

　　b.　The officer puts away the gun and handcuffs the criminal.

　　c.　無事警官は脱獄犯を逮捕できた。

　　d.　警察は銃で脅して手錠をかけました。

【patient に焦点】

(18)　a.　The man will be handcuffed and taken to prison.

　　b.　The criminal will be arrested and questioned.

　　c.　手を付いていた男性が拳銃を蹴り上げ，逃げ出します。

　　d.　逮捕されパトカーに乗せられる。

図 14

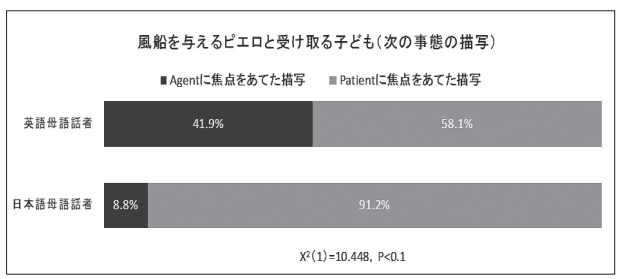

図 15

【agent に焦点】

(19)　a.　The clown will give the boy a balloon.

　　b.　A clown makes a balloon animal for a child.

　　c.　ピエロはそのまま風船で飛んで行きました。

　　d.　ピエロは子供に渡す前に風船を割りました。

【patient に焦点】

(20)　a.　The kid will go off happily playing with the balloon.

　　b.　The child accidentally lets the balloon go and begins crying.

　　c.　ピエロから風船をもらった男の子は，嬉しそうに帰って行きました。

　　d.　「ありがとう」と言って風船を受け取り帰る。

図 3（再掲）

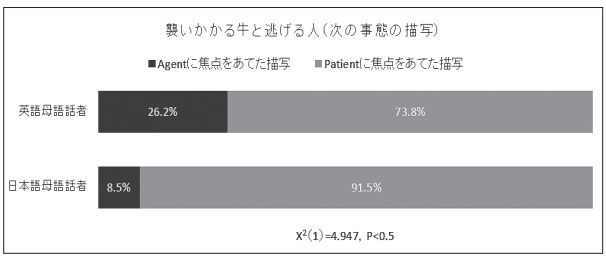

図 16

【agent に焦点】

(21)　a.　The bull will gore the man to death.

　　b.　Bull catches up to runner.

　　c.　牛は町外れまで追いかけてきました。

　　d.　牛が壁に突き刺さった。

【patient に焦点】

(22)　a.　The man escapes the charging bull in the nick of time by leaping onto a high wall.

　　b.　The man will be impaled by the bull's horns.

　　c.　観客席に逃げ込み助かる。

　　d.　男性は牛に追いつかれ，大怪我を負います。

図 17

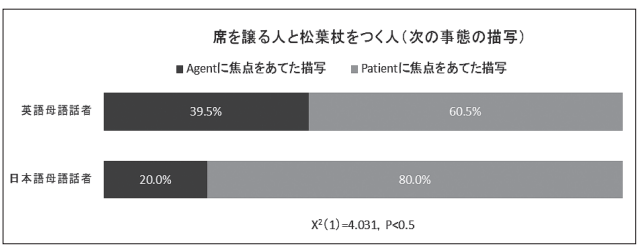

図 18

【agent に焦点】

(23)　a.　The man in the suit helps the injured man to sit.

b.　The porter carefully helps the man into a seat, before going to call for a wheelchair.

c.　男の人は席を譲りました。

d.　「こちらにお座りください。」と案内した。

【patient に焦点】

(24)　a.　The injured person sits down in the seat.

b.　The disabled man will accept the open seat.

c.　病人は男性のお陰で座ることが出来た。

d.　優先座席に足の不自由な人が座る。

図 19

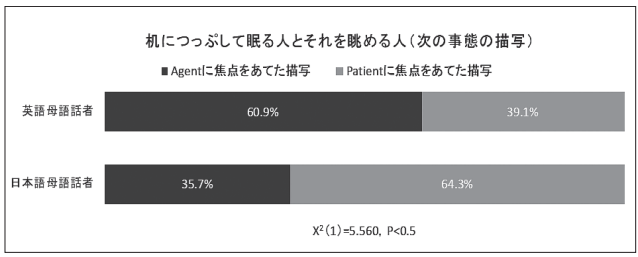

図 20

【agent に焦点】

(25)　a.　The boss yells at the employee for sleeping.

b.　A friend wakes up the student who fell asleep while doing his/her work.

c.　父親は受験勉強に疲れた息子に毛布をかけてやりました。

d.　後ろに立っている上司が疲れている部下に早く帰りなさいと言う。

【patient に焦点】

(26)　a.　The sleeping man at the desk gets awoken to take a proper rest.

b.　The employee is reprimanded for sleeping on the job.

c.　居眠りしていた男性は上司から厳重注意されました。

d.　後ろの人に叩き起こされる。

図 21

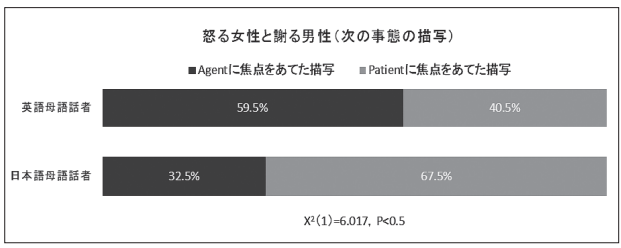

図 22

【agent に焦点】

(27)　a.　The lady will shout at the guy.

　　b.　The woman will forgive the man.

　　c.　女性は拗ねて何も話さなくなった。

　　d.　女性は男性に愛想を尽かしてその場から立ち去りました。

【patient に焦点】

(28)　a.　A man is chastised by an angry woman.

　　b.　The man will sleep alone on the couch tonight.

　　c.　男が女の欲しいものを買って，浮気を許してもらった。

　　d.　男性は女性の言うことを何でも聞くようになりました。

上記の例は，すべて英語母語話者のほうが日本語母語話者よりも，agent を主語に立てる割合が統計的に有意に高い例である。以下の 3 枚の画像についても，統計的に有意差があるとまでは言えないが，やはり英語母語話者のほうが agent を主語に立てて描く割合が高くなっている。

図 5（再掲）

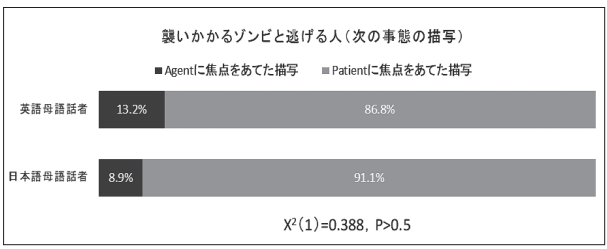

図 23

【agent に焦点】

(29)　a.　Zombies chase man into a deadend and eat his face.

　　b.　The zombies will keep chasing the panicked man.

　　c.　ゾンビに扮した男達は友人を脅かして大笑いしました。

　　d.　ゾンビは脚力がなく追いつけなかった。

【patient に焦点】

(30)　a.　The man runs very fast and manages to escape the two zombies.

　　b.　The man gets away but gets bitten by a different zombie a week later.

　　c.　男性は逃げ惑い，避難所に逃げ込みます。

　　d.　ゾンビに襲われて主人公は死んだ。

図 24

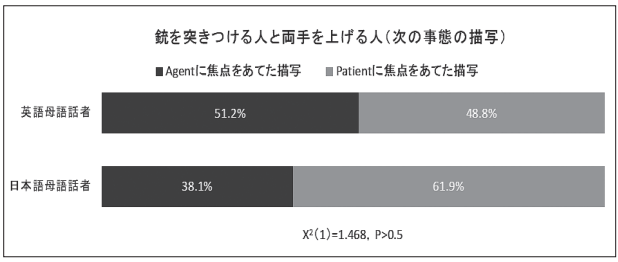

図 25

【agent に焦点】

（31）　a.　The robber leaves with a lot of money from the bank.

　　b.　The detective shoots the businessman.

　　c.　銃を持った人は男性からお金を奪って逃げました。

　　d.　ピストルに球がなくて打てなかったため，走って逃げた。

【patient に焦点】

（32）　a.　The man will be shot and killed

　　b.　The man with his hands up cooperates with the gun-wielding person.

　　c.　男はポケットの金庫の鍵を盗られました。

　　d.　銃を向けられている人が素直に手錠をかけられる。

図 26

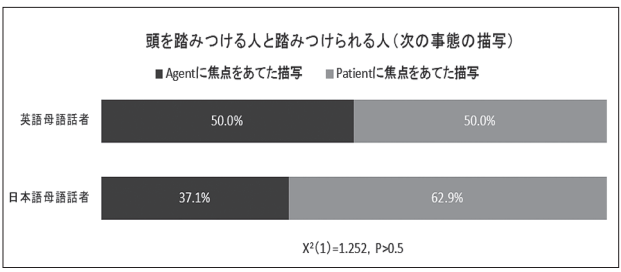

図 27

【agent に焦点】

（33）　a.　A playground bully makes a child lick his shoes to humiliate him.

　　b.　A student takes money from another student through bullying.

　　c.　頭をふんずけた男は逮捕されました。

　　d.　後日，この教師は生徒への体罰で免職になった。

【patient に焦点】

（34）　a.　the kneeling person stands up.

　　b.　The lower person dies from being curb-stomped.

c.　怒られていた部下が仕事を辞めた。
d.　上下座している人の我慢が限界にきて，相手を殴りました。

13 枚の画像のうち，日本語母語話者のほうが英語話者よりも高い割合で〈agent〉を主語に立てたのは以下の 2 枚のみであった。

図 7（再掲）

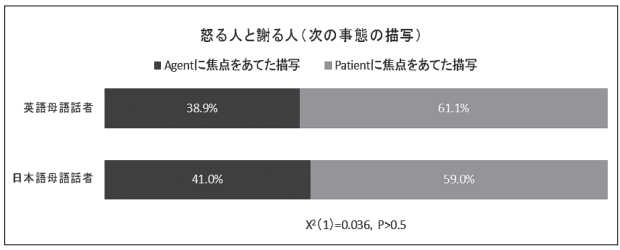

図 28

【agent に焦点】

(35)　a.　The person in the chair falls because he's an idiot and shouldn't be sitting like that.
b.　The person in the chair falls over.
c.　偉そうな上司はこの後後ろにひっくり返りました。
d.　言いすぎたと思い，社員のフォローをする。

【patient に焦点】

(36)　a.　The man will go back to his desk and grumble about how his boss is unreasonable.
b.　The employee gets reprimanded by his boss and is told to redo the entire project from the beginning.
c.　怒られていた部下は理不尽な上司にキレ部屋を出ていった。
d.　怒られた部下は，態度の悪い上司の悪口を言いました。

図 29

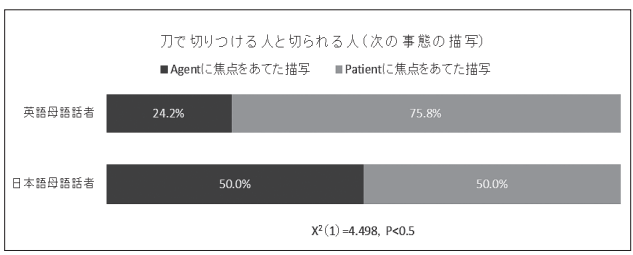

図 30

【agent に焦点】

(37)　a.　The attacker spares a moment to think about the killing.

　　b.　The warrior on the left will say some harsh words and then walk away victorious.

　　c.　左の人が刀をしまう。

　　d.　切った人が次の敵を倒しに走り去る。

【patient に焦点】

(38)　a.　The defeated samurai will die.

　　b.　A man dies from his wounds from a katana.

　　c.　切られた男が最後の反撃で切り返す。

　　d.　切られた方はしばらくして死んでしまう。

3.4. 結果の考察

今回の調査では，図 7 と図 29 の 2 例を除き，13 枚のうち 11 枚，つまり全体の 85% の画像において，英語母語話者のほうが日本語母語話者よりも agent を主語に立てて次の事態を描く割合が高いという結果であった。

画像で提示された事態を力動的な観点から見てみると，まず働きかけの内容は，鮫や牛，ゾンビなどが〈襲いかかる〉という直接的で物理的な働きかけの作用の場合もあれば，銃を〈突きつける〉，あるいは〈怒る〉といった銃や言葉による間接的な圧力である場合もあった。また，働きかけの強度についても，上記のような強いものから，仕事中に寝ている人をただ〈見る〉という非常に働きかけが弱いものまであった。働きかけの多くは攻撃的で patient にとってはネガティブな働きかけであったが，席を〈譲る〉，風船を〈与える〉など patient にとって好意的な働きかけもあった。

参与者に対する共感度という観点から見ても，agent は〈人〉であったり，牛，鮫のような〈動物〉であったり，ゾンビのような〈空想上の存在〉であったりと，共感度が高く捉えられやすい参与者からそうでない参与者まで，様々なものが提示された。

このように働きかけに関わる多種多様な事態が提示されたにも関わらず，ほとんどのケースで英語母語話者のほうが日本語母語話者よりも agent を主語に立てて次の事態を想像する割合が高いということは，日英語母語話者が同じ事態を異なった焦点のあて方で「捉えている」可能性が十分に示されたものと考える。すなわち，英語母語話者は agent に焦点をあてて事態を「描く」だけでなく，認識のレベルでもそのように事態を「捉える」傾向があるのに対し，日本語母語話者は「描き方」と「捉え方」の両方で patient に焦点をあてる傾向が英語母語話者より強いと考えられるのである。

また，英語母語話者が agent に焦点をあてて「捉える」傾向があるということから，英語母語話者は事態認識の際に行為連鎖／力動関係における〈力の源〉である参与

者に特に際立ちを感じやすいということが，また，英語母語話者に比べて patient に焦点をあてやすい日本語母語話者は，事態認識において共感度の高い参与者により際立ちを感じる傾向があるということが推測される。

4. 結語

以上，本研究では，伊藤・王（2016）の調査で明らかになった英語母語話者と日本語母語話者の事態の「描き方」の型の違いの背後に，それぞれの母語話者の事態の「捉え方」の型の違いがあるという可能性を示した。本研究と同じく「言語」と「認識」との関連性を検証しようとする言語相対論に関わる議論においては，数多くの検証実験が行われているものの，異なる言語の母語話者間の認識レベルでの違いを主張するものと否定するものが混在し，未だに明確な結論は得られていない（Roberson 他 2005）。その最も大きな理由は，各言語における言語現象の違いは観察可能であるのに対して，その背後にある「捉え方」という認識上の違いは直接的に観察することが不可能であり，検証が非常に困難なことである（Papafragou 他 2008）。これについては，様々な形で検証実験を積み重ねていき，人の認識のあり方を少しずつ明らかにしていくより他はないが，そのような中，本研究において，ある言語において特定の描き方が好まれる（偏重される）という，これまで言語相対論の議論の対象とされることの少なかった事態の描き方の「型」の違いに着目し，その違いがその言語話者の認識レベルにおける違いに根ざしている可能性を示せたことには一定の意義があるものと思われる。

また「言語」と「認識」の関連性について複数の見方が混在するのは，一つには，今井（2000）が指摘するように，「認識」という用語で「知識そのもの，メタ知識，記憶，知覚，推論，注意，情報処理プロセスなど，さまざまな種類・レベルの認識や認知活動（今井 2000: 428）」のどの側面を扱っているのかを明確にしないまま検証が進められていることがある。この点についても，本研究では，「認識」のうち，特に事態についてどの参与者に焦点をあてて捉えるかという「知覚・注意」という側面において，日英語母語話者の間に違いがあることを示すことができたと思われる。

ただし，注意しておかなければならないのは，この「知覚・注意」に関わる認識のあり方の傾向（捉え方の型）も，あくまで「思考・認識」の一形態における傾向である可能性があることである。というのも，本調査で確認された話者の「捉え方の型」は，発話することを前提とした思考法（thinking for speaking（Slobin 1987, Winawer 他 2007 も参照））である可能性があるからである。Slobin のいうように，発話を伴う場合の事態の捉え方と発話を伴わない場合の事態の捉え方に違いがあるとするならば，本研究では，後者の場合の事態の「捉え方の型」については明らかにはできていない。今後は，例えば，本研究で用いたような画像を提示するのみで描写は行わせず，agent と patient のいずれの参与者をよく記憶しているかという記憶のタスクを課す調査や，画像を捉えた際の被験者の目線の動きを記録する（eye tracking）調査などを行うことによって，発話を前提としない場合の事態の「捉え

方の型」においても，日英語母語話者の間で違いがみられるのかどうかを明らかにしていく必要がある。その上で，なぜ英語母語話者においては関係行為連鎖／力動関係が，そして日本語母語話者においては共感度が参与者の焦点化において優勢に働くのか，また，日本語母語話者において複数ある共感度の決定要因の中でどの要因が優勢で，そしてそれはなぜなのか，といったことを明らかにする必要もある。こうした調査・分析については今後の課題としたい。

参照文献

Au, Terry K. (1983) Chinese and English counterfactuals: The Sapir-Whorf hypothesis revisited. *Cognition* 15: 155–187.

Berlin, Brent and Paul Kay (1969) *Basic color terms: Their universality and evolution*. Berkeley and Los Angeles: University of California Press.

Bloom, Alfred H. (1981) *The linguistic shaping of thought: A study in the impact of language on thinking in China and the west*. Hillsdale, New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates.

Boroditsky, Lera (2001) Does language shape thought? Mandarin and English speakers' conceptions of time. *Cognitive Psychology* 43: 1–22.

Boroditsky, Lera., Lauren A. Schmidt, and Webb Phillips (2003) Sex, syntax, and semantics. In Dedre Gentner and Susan Goldin-Meadow (eds.) *Language in mind: Advances in the study of language and thought*, 61–79. Cambridge, MA: MIT Press.

Boroditsky, Lera and Alice Gaby (2010) Remembrances of times east: Absolute spatial representations of time in an Australian Aboriginal community. *Psychological Science* 21(11): 1635–1639.

Hinds, John・西光義弘（1986）『Situation and person focus：日本語らしさと英語らしさ』東京：くろしお出版.

池上嘉彦（1981）『「する」と「なる」の言語学：言語と文化のタイポロジーへの試論』東京：大修館書店 .

今井むつみ（2000）「サピア・ワーフ仮説再考：思考形成における言語の役割，その相対性と普遍性」『心理学研究』71(5): 415–433.

Imai, Mutsumi and Henrik Saalbach (2010) Categories in mind and categories in language: Are classifier categories reflection of the mind? In: Barbara Malt and Phillip Wolff (eds.) *Words and the mind: How words capture human experience,* 138–164. New York: Oxford University Press.

伊藤創（2016）「日本語・中国語・英語母語話者における事態参与者焦点化の決定要因の差異」『関西国際大学研究紀要』17: 11–22.

伊藤創・王蓓淳（2016）「日本語・中国語・英語における事態把握の「型」と事態描写の「型」の関連性」『政大日本研究』13: 21–47.

金谷武洋（2004）『英語にも主語はなかった：日本語文法から言語千年史へ』東京：講談社 .

Kay, Paul and Willett Kempton (1984) What is the Sapir-Whorf hypothesis? *American Anthropologist* 86: 65–79.

国広哲弥（1974）「人間中心と状況中心：日英語表現構造の比較」『英語青年』119(11): 48–50.

久野暲（1978）『談話の文法』東京：大修館書店 .

Kuno, Susumu and Etsuko Kaburaki (1977) Empathy and syntax. *Linguistic Inquiry* 8: 627–672.

Langacker, Ronald. W. (1990) Subjectification. *Cognitive Linguistics* 1: 5–38.

Langacker, Ronald. W. (1991) *Foundations of cognitive grammar,* Vol. 2: *Descriptive application.* Stanford: Stanford University Press.

Levinson, Stephen C. (1997) Language and cognition: The cognitive consequences of spatial description in Guugu Yimithirr. *Journal of Linguistic Anthropology* 7 (1): 98–131.

Lucy, John A. (1992) *Grammatical categories and cognition: A case study of the linguistic relativity hypothesis*. Cambridge: Cambridge University Press.

小野寺美智子（2008）「日英語の受動構文の認知的基盤：「事態把握」の観点から」『拓殖大学語学研究』119: 11–32.

森田良行（2002）『日本語文法の発想』東京：ひつじ書房 .
森山新（2005）「認知言語学的観点を取り入れた格助詞の意味のネットワーク構造解明とその習得過程」『平成 14 ～ 16 年度科学研究費補助金研究基盤研究（C）（2）成果報告書』.
尾谷昌則（2001）「いわゆる“対象のガ格”の正体を求めて―認知文法の観点から―」『白馬夏期言語学会論集』12: 45–60.
Papafragou, Anna, Justin Hulbert, and John Trueswell (2008) Does language guide event perception? Evidence from eye movements. *Cognition* 84: 189–219.
Roberson, Debi, Jules Davidoff, Ian R. L. Davies, and Laura R. Shapiro (2005) Color categories: Evidence for the cultural relativity hypothesis. *Cognitive Psychology* 50: 378–411.
Silverstein, Michael (1976) Hierarchy of features and ergativity. In: R. M. W. Dixon (ed.) *Grammatical categories in Australian languages* :112–171.
Slobin, Dan I. (1987) Thinking for speaking. *Proceedings of the thirteenth annual meeting of the Berkeley Linguistics Society* :435–445.
Talmy, Leonard (2000) *Toward a cognitive semantics, volume II: Typology and process in concept structuring*. (訳 : 高尾享幸（2000）「イベント統合の類型論」, 坂原茂（編）『認知言語学の発展』東京：ひつじ書房）347–451.
谷口一美（2005）『事態概念の記号化に関する認知言語学的研究』東京：ひつじ書房 .
Tomlin, Russell S. (1995) Focal attention, voice, and word order: An experimental, cross-linguistic study. In: Pamela Downing and Michael Noonan (eds.) *Word order in discourse*, 517-554. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins Publishing Co.
Tomlin, Russell S. (1997) Mapping conceptual representations into linguistic representations: The role of attention in grammar. In: Jan Nyuts and Eric Pederson (eds.) *Language and Conceptualization*, 162–189. Cambridge: Cambridge University Press.
外山滋比古（1973）『日本語の論理』東京：中央公論社.
角田太作（1991）『世界の言語と日本語：言語類型論から見た日本語』東京：くろしお出版 .
對馬康博（2011）「日英語の無生物主語構文の認知メカニズム：認知文法と認知モードによる解法」『文化と言語 札幌大学外国語学部紀要』74: 31–86.
Winawer, Jonathan, Nathan Witthoft, Michael C. Frank, Lisa Wu, Alex R. Wade, and Lera Boroditsky (2007) Russian blues reveal effects of language on color discrimination. *Proceedings of the National Academy of Sciences* 104: 7780–7785.

執筆者連絡先：
〒 661-0976
兵庫県尼崎市潮江 1 丁目 3 番 23 号
関西国際大学 基盤教育機構
e-mail: h-itou@kuins.ac.jp

［受領日　2017 年 8 月 15 日
最終原稿受理日　2018 年 5 月 7 日］

Abstract

Differences in the Way of Perceiving and Describing Events between English and Japanese Native Speakers

Hajime Ito
Kansai University of International Studies

When describing an event with an agent and a patient, English native speakers show a stronger tendency to put an agent into the subject position than Japanese natives. This seems to show that English natives perceive events with a stronger focus on the agent than Japanese natives.

This paper examines whether this linguistic-level tendency (and its difference between English and Japanese natives) stems from the difference on a cognitive level through an experiment in which subjects are presented with a set of events with an agent and a patient and instructed to imagine and describe what happens next. If English natives tend to put their focus more onto an agent than onto a patient, then they will imagine and describe what happens next to the agent often by placing the agent as the subject.

The results of the experiment support this hypothesis; English natives describe the next scene by putting the agent into the subject position more often than Japanese natives. This suggests that English natives tend to focus more on an agent than Japanese natives both on a cognitive and linguistic level.